様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月 ２５ 日現在

機関番号：２４１０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０４００６

研究課題名（和文）こどもの生活と発達の「見えづらさ」に着目した状況特定理論の構築

研究課題名（英文）Construction of a situation-specific theory focusing on the "difficulty of grasping" of children's lives and development.

研究代表者
片田　範子（Katada, Noriko）

三重県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：８０１５２６７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、こどもセルフケア看護理論を基盤とし、こどもの生活や発達の「見えづらさ」の現象と課題を明らかにし、こどもの主体性や健やかな成長を促すことを目指したアプローチにつながる状況特定理論の構築を目的とした。先行研究として取り組んだこどもセルフケア看護理論において、日々、成長・発達し続けるこどもの今後を想定することの困難さがある中で、支援者がどのようこどものセルフケアをとらえ、支援を行っているのかという課題に取り組んだものである。
本研究では、6つの異なる状況（急性期医療、重症心身障害、学童、保育園、特別支援学校、在宅移行）における「見えづらさ」の背景と要因、実践とその効果を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
こどもの能力を適切に判断することが重要である一方、生命に直結する緊迫した医療を必要とするこどもや慢性疾患や障がいのあるこどもの場合などは、疾患のコントロールや機能低下の予測がつきにくく、今後の生活や発達の想定が難しい。また、健康なこどもであっても多くの社会問題に直面している。
本研究は、現象から中核概念となるこどもの生活や発達の「見えづらさ」を検証するとともに、こどもの発信を見逃さないより具体的な支援を提示することが可能となる。我が国の子育ての分化的背景を踏まえた理論でもあり、こどもの人権や育ちを保障する支援方法を明らかにしたものであると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the phenomenon and issues of " difficulty of grasping" children's life and development based on the children's self-care nursing theory, and to construct a situation-specific theory that leads to an approach that aims to promote children's independence and healthy growth. In the previous study on children's self-care nursing theory, we addressed the issue of how supporters perceive children's self-care and provide support in the midst of the difficulty of envisioning the future of children who continue to grow and develop day by day.
This study clarified the background and factors of "difficulty of grasping" in six different situations (acute care, severe mental and physical disabilities, school children, nursery schools, special needs schools, and transition to home), as well as the practice and its effects.

研究分野：看護学

キーワード：状況特定理論　こども　セルフケア　生活　発達

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

申請者は、こどもの主体性を引きだす方略を提示することを目的とし、現象を明らかにしながら看護の発展に努めてきた。第一段階として、平成 25 年度挑戦的萌芽研究「小児のセルフケア看護理論の構築に向けた必要要素の抽出によるモデルの作成」（研究代表者：片田範子）に取り組んだ。小児看護学を担当する大学教員と小児看門看護師を研究分担・協力者とし、こどものセルフケアに着目した理論構築に取り組み始めた。

第二段階は、前述した研究成果を平成 27 年度基盤研究（A）「オレムのセルフケア理論を基盤とした『こどもセルフケア看護理論』の構築」（課題番号 26252098）へと繋ぎ、オレムのセルフケア不足看護理論を教育・研究・実践に活用している 6 大学の教育研究者と、全国の小児看護専門看護師を研究分担・協力者とし、こどもを主体とする支援方法や、周囲の大人たちが、こどもの持つセルフケア能力を見極めたうえで支援を判断するプロセスを提示する臨床に根差した理論構築を行った。

本研究は、理論構築の過程において明らかとなったこどもの生活と発達の「みえづらさ」の現象に着目し、支援方法を提示する状況特定理論の構築に取り組むものである。医療や看護領域を超え、教育・福祉など様々な子育て支援の変革をもたらす一助となるものと期待している。

２．研究の目的

本研究の目的は、こどもセルフケア看護理論を基盤とし、こどもの生活や発達の「見えづらさ」の現象と内在する課題を明らかにし、こどもの主体性や健やかな成長を促すことを目指したアプローチにつながる状況特定理論を構築することである。

これまでも申請者は、こどもの主体性と育ちを支援する実践に活用できる研究成果を提示することを第一義的に考えて研究を進めてきた。こどもセルフケア看護理論は、小児看護の実践者にも広く意見を求め、臨床での活用を通して事例検討を重ね、こどものとらえ方や、こどものセルフケアの考え方、支援方法を導く基本的な考え方を示した。

こどもセルフケア看護理論を基盤とした状況特定理論を構築することにより、「見えづらさ」のある状況において多様な支援者による一貫したケア方法を提示するとともに、必要とされる支援者の専門性を尊重・共有・補完し合いながら、チームとしてこどもの生活と発達を支援する実践につながると考える。

発達途上にあるこどもは、こどもの養育に責任を持つ親または養育者がこどものセルフケアを補完することが不可欠である。多様な支援者と共にこどもを第一義的なケア対象者として捉え、こども自身のセルフケア能力に応じた支援を行うことは、こどもの尊厳を守る支援者の役割と責任を明確にするとともに、学術と実践が融合する創造的な支援方法を導くことが出来るのではないかと考えている。

３．研究の方法

研究の方法としてこどもセルフケア理論を基盤とし、Im（2005）の提唱する統合的アプローチによる状況特定理論の構築を目指した。状況を大きく 3 テーマとして、それぞれの場で勤務する看護職やケアワーカー、指導員等を対象として、聞き取り調査をおこなった。①急性期医療におけるこども、②地域で生活し保育・教育をうけるこども、③地域で特別な支援を必要とするこどもの３テーマを設定した。こどもの居場所である研究フィールドは、①では病院など医療施設、②では保育所、学童保育、特別支援学校、③では在宅医療、施設入所であり、6 つの研究フィールドとなった。

研究代表者は、研究チーム全体の進捗状況を把握し、研究に参画しながら円滑な研究推進を図った。研究組織としてはそれぞれの研究分担者が担当する施設等を含むフィールドごとにサブ組織チームを構成し、データ収集（半構成的面接・フォーカスグループミーティング）・質的記述的に分析を行った。サブ組織チームは看護職、相談員や介護福祉士等も共同研究者として参加した。

４．研究成果

こどものケアニーズを把握することは看護に欠かせない視点であるが、発達や個性を含め、こどもの持つ能力を把握することの難しさは先行研究から明らかになっている。本研究では、サブ組織チームごとの研究フィールドから得られた研究成果を以下に示す。

１） 急性期医療を必要とするこども

小児集中治療の場で看護師がとらえるこどもの力の見えづらさと、こどもの力を引き出す看護を明らかにする目的で、小児集中治療の経験を持つ看護師 10 名に半構成的面接を行い、M-GTA による分析後、フォーカスグループミーティングを行った。結果、看護師は病状・治療のフェー

ズ、全体のバランスを統合してみることや、普段のこどもの生活・発達、こどもの力をイメージして補うことで、こどもの力の見えづらさを補いながら〈病気や治療の悪影響を防ぎ、発達や生活のために今できることをする〉〈消耗をさせないように、こどもの生きる力を整える〉〈こどもの状態とニーズに合わせ、回復に向けてこどもの力を引き出す〉ことで、こどもの力を引き出していた。

２） 保育園に通うこども

保育所でのこどもの発達と行動の見えづらさを検討するために、保育士 5 名と看護師 3 名にインタビュー調査を実施した。保育士、看護師ともに「こどもの発達や生活習慣の気になる様子」から見えづらさを感じていた。保育士は集団を大切にしながらもこどもの力を最大限に引き出しその子なりの目指すこどもの姿に近づけるよう、思考錯誤しながらこども達とかかわるようにしていた。看護師は、こどもの様子に確信が持てない混沌とした中で 3 歳を目安に、こどもの健やかな育ちをつなぐために必要な環境づくりや、こどもの成長を待つだけではない意図的な働きかけを行っていた。しかし、こどもの行動や発達に影響を及ぼす背景や要因の多様性、保育士や看護師の置かれている立場や経験の違いが見えづらさの捉え方や、支援に影響を及ぼしていた。

３） 地域で特別支援学校に通うこども

知的障がいがあり特別支援学校に通学しているこどもの生活と発達の「見えづらさ」は、特別支援学校 3 校の教諭 14 名を対象としたインタビュー調査により、こども自身の知的障がい、こどもとかかわる教諭と保護者の認識等の違い、および教育システムによる要因から生じていることが抽出された。「見えづらさ」により、教員の〈こどもへの支援の難しさ〉、こども自身〈他者との関係の難しさ〉が生じ、そのことが、〈こどもの心のあり様〉と〈こども自身の能力の発揮しづらさ〉に影響していた。その結果、こどもの発達の遅れに繋がっていることが推測された。

４） 地域で生活する学童期のこども

地域で生活する学童期のこどもの生活と発達の「見えづらさ」の現象とその要因を明らかにするため、地域で支援する専門家 9 名にインタビューを行い、個人主義的な世間のありようなど社会背景の他、こども自身が意図的に見せないなど、見えづらさの要因として明らかとなった。

５） 病院から在宅に移行し在宅生活する医療的ケアを必要とするこども

病院から在宅生活に移行する医療的ケア児と親の見えづらさと、こどもと親の力を引き出す看護を明らかにする目的で、インタビューを行った。見えづらさにはこどもの要因と親の要因と、こどもと親が相互作用しながら変化・適応していくゆえの見えづらさが明らかになった。看護師はこどもに対して〈身体的状況を整える〉ことを基盤に、〈こどもが体験する〉ことを通して〈こどもが適応していくことを助ける〉とともに、〈こどもの反応を親とともに意味づけ〉〈親がその子の親であることを意味づける〉など、こどもと親の相互作用が促進されることを支援していた。

６） 施設で長期入所する重症心身障がいのあるこども

施設で長期入所する重症心身障害児の生活と発達の支援の現状と、支援を行う際に「見えづらさ」の現象について、2 施設 14 名の支援者（看護師 9 名、保育士 2 名、介護福祉士 2 名、児童相談員 1 名）へインタビューを行った。

支援者は、こどもを〈コミュニケーションをとる手段が少ない〉が〈説明できない力をもつ〉存在としてとらえ、〈施設がこどもの安全基地〉でありながら〈集団の中で制限が多い暮らし〉、〈親・養育者からの支援不足〉な生活であると捉えていた。さらに、このような生活は、〈こどもの反応が読み取りにくいことによるこどもの持つ力の見えづらさ〉や〈集団生活の中で個別に対応できないことによる見えづらさ〉、〈障害の程度や家庭の事情により退所後の生活が想定できないことにより見えづらさ〉を背景とする「見えづらさ」の現象が特徴的であった。

こどもセルフケア看護理論（2019）において、「成長発達に応じて親または養育者や周囲の人々はこどもの日常生活に関わり、その生活へのかかわりを通し学習することでこどもは情緒、認知、自我、社会性、思考、生活行動を発達させる（p.33）」と述べているように、こどもの生活と発達は密接に関連する。本研究において、こどもの生活や発達を「見えづらさ」という概念から現象を検証したことによって、こどもの発信を見逃さない、より具体的な支援を提示することが可能となった。しかし、状況の違いに関わらず共通する見えづらさもあり、こどもの置かれている状況による見えづらさの違いとして理論的に言及する結果には至っていない。今後さらに子育ての文化的背景なども踏まえた状況を特定する要素を含めた検討が必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 原朱美,片田範子
２．発表標題 医療型障害児入所施設で暮らすこどもの「その子らしい」暮らしと発達を考えた支援とは？
３．学会等名 第2回 理論看護研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 望月浩江、添田啓子、田村佳士枝
２．発表標題 小児集中治療の場で看護師が捉えるこどもの力の見えづらさとこどもの力を引き出す支援
３．学会等名 日本小児看護学会第33回学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 両角理恵、木村美佳、高橋良子、眞鍋裕紀子、及川郁子
２．発表標題 保育現場における保育士の見えづらさ
３．学会等名 第29回日本保育保健学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 勝田仁美、本田順子、吉川亜矢子、碇定永里雅
２．発表標題 学童期におけるこどもの生活と発達の『見えづらさ』の現象とその要因
３．学会等名 日本小児看護学会第33回学術集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小室佳文、加藤令子、沼口知恵子、西川菜央
２．発表標題 特別支援学校教諭が認識する知的障がいのあるこどもの生活と発達の「見えづらさ」の構造
３．学会等名 日本小児看護学会第33回学術集会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	添田　啓子 (Soeda Keiko) (70258903)	埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授 (22401)	
研究分担者	加藤　令子 (Kato Reiko) (70404902)	関西医科大学・看護学部・教授 (34417)	
研究分担者	及川　郁子 (Oikawa Ikuko) (90185174)	東京家政大学短期大学部・短期大学部・教授 (42681)	
研究分担者	勝田　仁美 (Katsuda Hitomi) (00254475)	兵庫県立大学・看護学部・客員研究員（教授） (24506)	
研究分担者	原　朱美 (Hara Akemi) (70613800)	関西医科大学・看護学部・講師 (34417)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	河俣　あゆみ (Kawamata Ayumi) (40743224)	三重大学・医学部附属病院・看護師長 (14101)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	望月　浩江 (Mochizuki Hiroe)		
研究協力者	田村　佳士枝 (Tamura Kajie)		
研究協力者	両角　理恵 (Morozumi Rie)		
研究協力者	木村　美佳 (Kimura Mika)		
研究協力者	高橋　良子 (Takahasi Ryoko)		
研究協力者	眞鍋　裕紀子 (Manabe Yukiko)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	小室　佳文 (Komuro Kafumi)		
研究協力者	沼口　知恵子 (Numaguchi)		
研究協力者	仁宮　真紀 (Ninomiya Maki)		
研究協力者	本田　順子 (Honda Junko)		
研究協力者	吉川　亜矢子 (Furukawa Ayako)		
研究協力者	碇定　永里雅 (Ikarisada Erika)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関